



# 読書の楽しさを伝えたい

林 千代

近年、インターネットや映像メディアが、若者たちの生活を浸食している。毎日、数時間にもわたって、パソコン・携帯・テレビの画面を眺めて過ごす学生はかなりの割合に及ぶであろう。それにともなう、本を読まない「不読者」が増加の一途をたどっている。2008年に東京大学の研究グループが5万人の大学生を対象に行った調査によると、一月に漫画以外の本を「4冊以上読む」学生は16%、「1冊読む」学生は28%、「全く読まない」学生は29%で、本をほとんど読まない学生は、なんと6割近くになる。試しに国立音大生に「本を読みますか」と質問すると、大半の学生から「ほとんど読まない」という答えが返ってくる。

私たち大学で教育に従事する者は、この現実をどのように受け止めればよいのか。「こんな時代だから、ある程度の読書離れは仕方がない」とあきらめるのか。しかし、子供のころから読書に親しみ、何冊もの心を揺るがす本に出会い、読書を通して「学び」を培ってきた私たちの世代は、そう簡単にあきらめることができない。なんとかして、若い世代に、読書の楽しさを伝えたいという思いが募る。活字という記号を自分の頭で組み立てて、ことばに変換するという知的な作業を通して、新しい知見を獲得し、自分の世界を広げてほしい。テレビの画面を「受身的に」眺めるのとは全く異なる「能動的な」読書のパワーを経験してほしい。本の中で、国境を超えて、世界中の作家や人々と出会い、対話をしてほしい。

そのためにはどうすればよいのか。アメリカの心理学者であるチクセンミハイは、「フロー理論」にその答えを見つけている。「フロー」とは、内発的に動機づけ

られた活動（音楽の演奏、スポーツ、チェス、ダンス、ロッククライミングなど）を行っている際に、時を忘れるほど注意を集中し、その行為自体が目的となる状態、つまり行為者と行為が一体化する経験である。読書においても、私たちが時の立つのを忘れて、お話の一部になるとき、食事でも忘れてミステリー小説を一気に読み進むときに、「フロー」は起こる。チクセンミハイは、このような「フロー」体験を読書で繰り返し経験することにより、心の内から湧き出る「読みたい」という願望が強まり、その結果、読書量が増え、読書の幅が広がり、生涯を通じての「自律した読書人」が育つとしている。

学生達の読書における「フロー」体験を促すために、私たちにできることは何か。その一つは、彼らが「フロー」を経験しやすいように読書環境を整えて、学生の読みを「伴走」していくことであろう。具体的には、学生に私たちの読書体験を伝え、どのような本を読めば良いかを示すことである。本を読むことに困難に感じている学生には、読みやすく、そして楽しめる本を提示し、読書会を開き、読みのプロセスをコーチすることもできる。他大学での実践例としては、創価大学の「全学読書運動」、西南学院大学における招聘した著名人や教員がリレー式で読書に関する講義を担当する「読書教養講座」、中央大学での読むことと書くことを結び付けた「リテラシー教育」などがあげられる。これらの先例からも学び、国立音大生に読書の楽しさを伝えたい。これらの試みが学生の「教養力」の向上につながることを確信する。